【学力向上フロンティアスクール用中間報告書様式】（小学校用）

都道府県名	岐　阜　県

Ⅰ　学校の概要（平成１５年４月現在）

学校名	岐阜県恵那市立大井小学校					ﾌﾛﾝﾃｨｱﾃｨｰﾁｬｰ	鈴木　穂実		
学　年	１年	２年	３年	４年	５年	６年	特殊学級	計	教員数
学級数	2	2	2	2	2	2	2	１４	２１
児童数	５９	４９	６２	５１	５７	７０	4	３５２	

Ⅱ　研究の概要

１．研究主題

自らの学びを創り出す子どもの育成
ー算数科「少人数指導」・理科「ＴＴ指導」を通してー

２．研究内容と方法

(1)　実施学年・教科

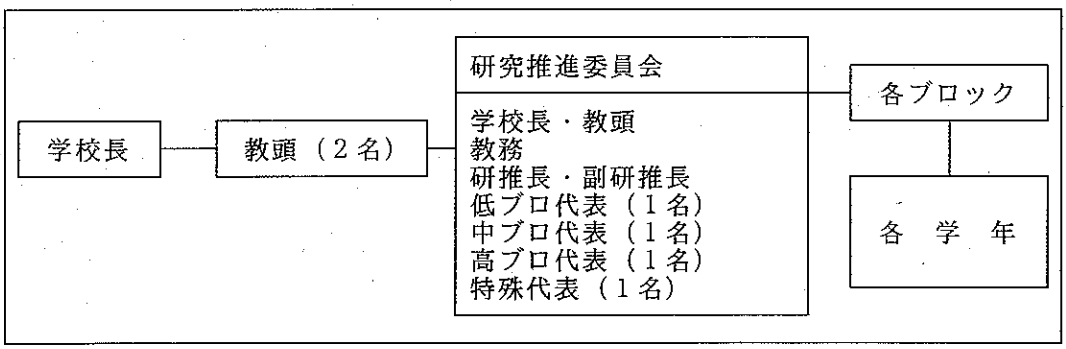
・全学年・算数
　昨年度は算数科で「個の学びを保障し、個を伸ばす少人数指導の効果的なあり方」という研究主題で研究推進をして、効果的な少人数指導の形態を共通理解することができた。また、子どもの習熟や理解の状況の差が出やすく、習熟されていないと系統的な学習が困難であるためより個に応じた指導をすることが必要とされる教科であるため。
・５，６年生・理科
　、算数科で身に付けようとしている自ら学ぶ力を様々な学習に生かし、子どもがさらに自力解決をする能力を育てて行きたいと考えたため。また、本校の教師の専門性を生かすことができる教科であるため。

(2)　年次ごとの計画

平成15年度	○　テーマ 自らの学びを創り出す子どもの育成 ー算数科「少人数指導」・理科「ＴＴ指導」を通してー ○　研究の見通し 子どもの習熟の度合い・分かり方等、個々の実態に応じた学習活動を工夫改善し行うことによって、学ぶ喜びを味わい、追究意欲をもち、自ら学ぼうとする子どもを育てることが出来る。算数科で培われた自ら学びを創り出す姿勢をさらに確かなものにするために５，６年生の理科で教師の専門性を生かしＴＴ指導を取り入れた学習を展開することにより研究主題を追究することができる。 ○　研究の内容・方法 （１）個に応じた指導のための指導方法・指導体制の工夫改善 ①子どもが自ら学ぼうとする学習過程の工夫 ②本単元に関わる子どもの思考傾向や習熟の実態把握 ③子どものつまずきに基づいたコース分け （２）個に応じた指導のための教材開発 ①学習意欲を喚起するような導入、展開時の学習材の工夫 ②コース別学習時のグループに応じた手立てや習熟のためのプリントなどの工夫 （３）授業に生きる学力の評価の工夫 ①発言やノートによる評価 ②習熟の結果による評価 ③子どもの反省・質問による評価 本年度は３つの内容の中の（１）を重点内容とし、それを支える内容として（２）、（３）をとらえて研究を推進する。

平成16年度	○　テーマ 自らの学びを創り出す子どもの育成 ー「確かな学力の定着」を図る指導の工夫ー ○　研究の見通し 子どものつまずきを把握し習熟の差に対応しながら、一人一人の学力の定着を図るために少人数指導やＴＴ指導を導入し、きめ細かな指導をする。また、問題解決的な学習を展開することによって子どもは、追究し解決する喜びを味わい意欲的に学習するようになる。このような学習を進めることによって子どもに学力が確かなものとして定着し、自ら学ぼうとする子どもが育つ。 ○　研究の内容・方法 （１）個に応じた指導のための指導方法・指導体制の工夫改善 ①子どもが自ら学ぼうとする学習過程の工夫 ②本単元に関わる子どもの思考傾向や習熟の実態把握 ③子どものつまずきに基づいたコース分け （２）個に応じた指導のための教材開発 ①学習意欲を喚起するような導入、展開時の学習材の工夫 ②コース別学習時のグループに応じた手立てや習熟のためのプリントなどの工夫 （３）授業に生きる学力の評価の工夫 ①発言やノートによる評価 ②習熟の結果による評価 ③子どもの反省・質問による評価

(3)　研究推進体制



Ⅲ　平成１５年度の研究の成果及び今後の課題

１．研究の成果

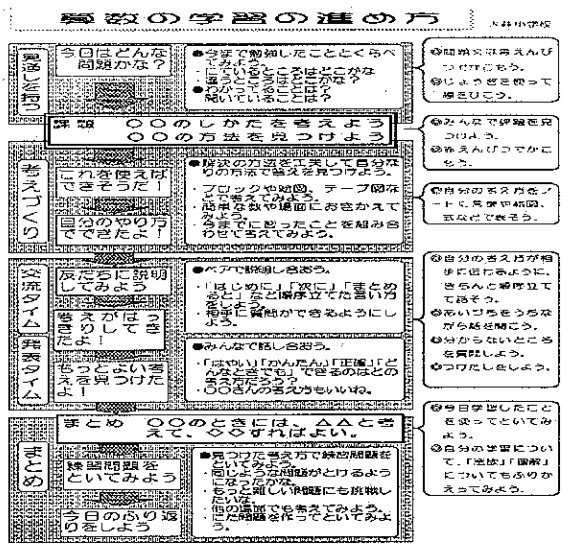
（１）個に応じた指導のための指導方法・指導体制の工夫改善について

①指導体制の工夫について

算数科では全学年でＴＴ指導や少人数指導ができるように各ブロックに１人ずつ少人数指導のための教師を位置付け、全時間指導に当たることができるようにした。単元指導計画には、単元のどの時間にどんな形態で学習を進めるか明記した。また、個に応じた指導のための手立ても明記した。この計画により本校の全ての職師が共通理解をして指導にあたることができるようになった。高学年の理科では教師の専門性を生かしてＴＴ指導を取り入れた。（２人の教師のうちのどちらかが免許所有者）子どもの知的好奇心を喚起する事象提示、科学的な追究の仕方、実験・観察器具の正しい操作の仕方等ＴＴの指導形態を工夫し、個に応じるための学習展開を行うことができた。

②学習過程の工夫について

＜算数の学習の進め方＞　　少人数指導を進めるにあたって



子どもが自ら学びを創り出していけるように各教室に「算数の学習の進め方」を掲示した。これを参考にすることによって子どもは既習内容を自ら振り返り、教師の指示がなくても学習を進めることができるようになった。「発表タイム」という考えの交流時間を位置付けたことにより、子どもが意識して自ら仲間と話し合いをするようになった。この時間を位置付けることによって、子どもたちに主体的に問題を追究する姿勢が育ってきた。また、どの教師が少人数やＴＴ指導を担当しても、教科や単元の目標を着実に達成することができた。

（２）個に応じた指導のための教材開発

①問題提示のあり方や問題との出合わせ方

低学年では、子どもに問題の場面を明確にとらえさせるために導入時に提示する教材を工夫した。この場面で用いる具体物等は、考えをもたせる段階の操作にも活用できるように考えて作っている。中・高学年では本時のねらいに迫るために、個の学習状況に応じて取り組む問題を工夫したり、問題との出合わせ方を工夫した。４年生の「２８０÷４２」の式になる文章問題を考えさせるときに、習熟に時間を要するコースの子どもには「２８÷４」→「２８０÷４」→「２８０÷４０」というように既習の内容を想起させながら、数字を問題に近づけていくような出合わせ方をした。

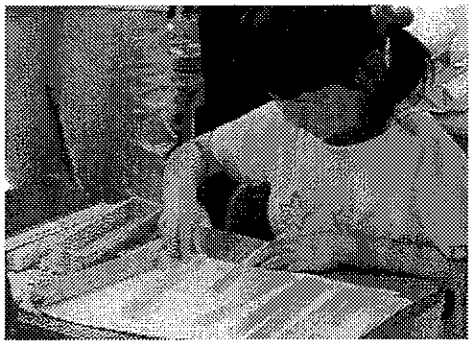
理科では単元「魚と人のたん生」の第１時で人の受精卵とメダカの受精卵を同時に見せて、どちらが人のものなのかと投げかけ、「発生」について興味をもたせる導入を工夫した。

②させたい操作を明確にし、一人一人が確実に操作できる学習プリントの活用

子どもが考えを作り出すためには様々な操作が必要である。そのために、子どもが操作しやすい物を提示したり、操作がよく分かるプリントを用意したりすることで子どものが学習状況が把握しやすく援助を必要としている子に対応しやすいことが実証できた。

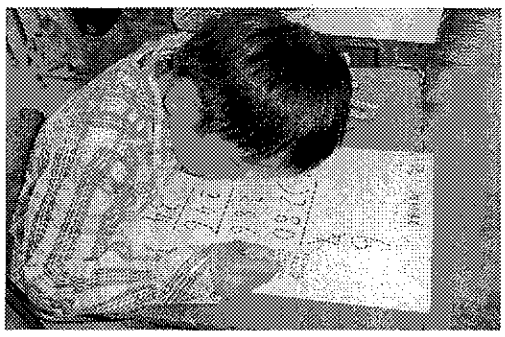
＜２年生＞

―位取り表を使ってブロックを操作して繰り下がりを理解する子―



＜４年生＞

―Ａ３判紙に自分の考えを根拠を示しながら書いている子―



中学年や高学年では自分の考えを仲間に伝える手立てとしてＡ３判紙を利用している。これは、判が大きいため考えを比較する場面でそのまま黒板に添付すれば交流ができるという利点がある。

２．今後の課題

少人数指導やＴＴ指導を行うための指導方法・指導体制をさらに工夫していかなければならない。事業の目指している「一人一人の学力向上」を図るには、個の学力を仲間との関わりの中で伸ばし、確かなものにしていくことを考えな

ければならない。そのために、教師による子どもの評価を適切な時間に評価規準に基づいて行い、子どもの次時の学習に役立てる手立てを考える時の資料にする必要がある。上述のことから今後の課題は、子どもに確かな学力をつけるための評価の方法や指導への生かし方の工夫をすることである。また、子ども自身が自己評価、相互評価ができるように評価内容や評価方法を工夫する必要がある。

Ⅳ　学力等把握のための学校としての取組

・平成１５年４月　３・５年　業者作成の学力テスト　　（市教育委員会実施）
・平成１６年２月　５・６年　学力状況調査　　（岐阜県教育委員会により実施）

Ⅴ　フロンティアスクールとしての研究成果の普及

１．学力向上フロンティア事業地区公表会
・日時　平成１６年２月５日（木）
・場所　岐阜県恵那市立大井小学校
・対象　岐阜県東濃地区小・中学校教職員　大井小学校保護者　学校評議委員
・目的　フロンティアスクールとしての「学力向上」のために行った研究の成果を授業公開と実践交流を通して地区内の各小・中学校に広めること

２．ＨＰ作成やパンフレット作成について
①ＨＰ作成
ＨＰ上に本校の学校行事予定を公開しその中に研究授業の日を明記している。また、研究授業の様子もＨＰで公開している。
②パンフレット作成
地区公表会の資料として研究の内容をまとめた冊子と研究の成果を分かりやすく写真で説明したリーフレットを作成し配布
③フロンティアティーチャーとしての研究成果普及のための活動実績予定
市内の教科研究会の場で指導体制や指導方法の工夫について実践成果を資料で説明している。また、平成１６年２月５日の地区協議会において地区の小・中学校の教師に研究実践について成果と課題を報告し、各学校で生かせるところは生かしてもらえるように働きかけをする。

【新規校・継続校】　■１５年度からの新規校　□１４年度からの継続校

【学校規模】　□６学級以下　□７～１２学級　■１３～１８学級　□１９～２４学級　□２５学級以上

【指導体制】　■ 少人数指導　■Ｔ．Ｔによる指導　■ 一部教科担任制　□その他

【研究教科】　□ 国語　□ 社会　■算数　■理科　□ 生活　□ 音楽　□図画工作　□家庭　□ 体育　□ その他

【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】　■ 有　□ 無